

徳野 雅仁

みんな元気に生きている

自然界には、ささいなことのようでありながら、実に不思議なことがよく起ります。それは、室内のテーブル上で小さな器を利用して香り高いクレスのもやしをつくっているときでした。タネを密にまくと、発芽後、光を求めていつせいに白い幼茎を徒長させます。光を遮って発芽させ、幼茎が伸びたところで明るい場所に出し、子葉が刻々と緑色に変化する様子を眺めていたときでした。子葉の上に何かがいるのです。それは、一匹のアブラムシでした。いつ飛来したのか、なぜ、いるはずのないこの室にいるのか、不思議な思いにかられました。この室の窓は普段開けることはなく、庭に面した室からは廊下を経て、一番奥の室に位置しているのです。クレスの香りに誘われ、もし、庭に面した窓から入り、廊下伝いに飛来したとしたら。けなげに、そして、必死にクレスを求めて飛ぶ姿を想像すると、不思議な感動を覚えたのでした。

また、十数年前、謎めいた出来事がありました。それは、挿し芽用に口径十八センチの駄温半鉢を買い、やはり同時に購入した赤玉土を袋から直接入れ、窓際の手すり上部の角に板をあてがい、その上に置いた鉢内で起きました。結局、挿し芽は行わず、翌年秋まで放置し、畑にまいたサヤエンドウの残りダネをこの鉢にまいたのでした。赤玉土だけですから、どう育つかの確認です。発芽したサヤエンドウのツルを、手すりと物干し竿を

結んだ紐に誘引しました。弱々しくも美しいツルを伸ばし、僅ながらも収穫を得ました。一、二カ月後、枯れたツルを刈りとつていたところ、突然、太いミニズが顔を出し、一瞬のうちにUターンして鉢土に滑り込んだのです。我が目を疑いました。外部から侵入することは全く考えられず、新しい鉢に未開封の乾燥した赤玉土のみを用いた状況を考えると、大きなミニズの存在は何とミステリアスなことでしようか。

野菜づくりをしているとこのように、思いがけないことがよく起ります。転居した新しい庭で、栽培を始めた年のことです。篠數跡の岩盤状の土を砕き、急速、乾燥鶏フンと油カスを施してトマトを数株植えました。そのうちの一株が梅雨明け前に青枯れ病になり枯れ落ちました。土壤伝染性の病害が発病した株はただちにとりのぞいて焼却し、土壤消毒を勧める声が多いなか、この株の茎を地際十七センチを残して刈りとり、根を洗い、庭の隅の無肥料地に植え込んでおきました。しばらくして、秋まきの準備のため草を刈っていたところ、株元から新しい茎を伸ばし、元気に育つているトマトを発見したのです。無残な姿で倒伏し、回復不可能と思われたトマトが見事に生き返った不思議な出来事を目のあたりにし、つくづく未知なる生命力の確かさに感心したのでした。

(イラストレーター イラストも筆者)

